

北への最終便

戸上 平

秋田県・五六・美容師

拝啓 法名一道院様、貴方が私の町に来たのは、三十二年も前の事です。貴方の会社が作った火力発電所、今も動いています。浜辺を通る時懐かしく見上げています。仕事のための別居、結婚十七年目、あの朝突然「御主人亡くなりました。本社へすぐ来て下さい」との声が、地獄から私の命までも奪うかのように全身を覆いました。

全国が仕事先で、行かなかった県が四県、外国へも何度か行きましたね。心臓が壊れても不思議ではありませんでした。

私達結婚前、二つの約束しましたね。子供が生まれたら絶対離婚をしない、貴方の母上が病んだら看るでした。愛娘洋子は高三まで無欠席通学を十二年間通し、カナダへのホームステイ、イギリスへの留学など経験し、心優しい娘に成長しました。母上には貴方に似た曾孫を抱かせてから、そちらの世界へと思っています。洋子はまだ嫁いでいないので、母上の霊山行きのキップは予約していません。一人で淋しいでしょうが暫くお待ち下さい。

同居しない私達の結婚は、非現実的と思える時もありましたが、子育てと母上の長期介護を通し、忍耐と慈悲心を培う事ができました。この経験をボランティア活動を通して、社会へ貢献しています。

貴方が旅立った冬が又来ます。あの時遺骨を抱いて北への最終便、空港からの大都会の眩い輝き、その光を見た時貴方がこの街を離れられなかった理由が理解できたような気がしました。「最後の東京の夜ね、しっかり見てね」と遺骨に語りかけましたね。心の中では「この人はもう何処へも飛んで行かない。私の命の中に戻って来たのだ」と思いました。一時間後猛吹雪が私達を待っていました。遺骨を包んだ白布と両手に雪が積もり、貴方の涙とも思える冷たさでした。半年雪に埋もれるこの田舎町を好きになれなかった事が更に理解できました。雪国の女は、あの猛吹雪にも負けない深い愛を胸に秘め、この身が粉雪に変わり貴方の元へ飛び立つまで、力強く生きてまいります。 敬具

十三回忌の一道院様へ

妻

佳作

*亡き夫の十三回忌を思い、報告と愛をこめて書かせていただきました。送り先を宇宙のどこかへと
思い楽しく書かせていただきました。